

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820010

研究課題名（和文） フランスにおけるポール・ゴーガンの受容とコレクション形成史

研究課題名（英文） The Reception of Paul Gauguin and the History of the Museum's Collections in France

研究代表者

小泉 順也 (KOIZUMI MASAYA)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：50613858

研究成果の概要（和文）：本研究は、ポール・ゴーガン（1848 - 1903）のフランスにおける受容を、美術館におけるコレクション形成史の観点から検証するものである。具体的には、美術館委員会の議事録などの一次資料を参照した上で、美術史の同時代的なコンテクストに焦点を当てながら、芸術家受容において美術館が果たした役割を分析した。フランス各地の美術館に所蔵されたゴーガン作品を調査した結果、コレクターの寄贈や遺贈によってもたらされた作品が大半であるのに対し、購入によって収蔵された作品は僅かで、その経緯をめぐる更なる調査が必要であることが確認された。美術館は歴史を映し出す鏡であるだけでなく、歴史的な変化を促す装置でもあり、そこには様々な要因が絡み合っている。本研究を通して、ゴーガンの芸術家受容とコレクション形成史の密接な繋がりを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated the reception of Paul Gauguin (1848-1903) in France in terms of the collection of his works in art museums. It analyzed a variety of primary sources, such as summary minutes of museum council meetings and examined the role that art museums have played in his reception, with a particular focus on its contemporary context in art history. After an intensive investigation, most of the collection includes groups of his works which were acquired by gift or bequest and further study on the historical process is therefore needed about few purchased works. The museum is not only a mirror of the history, but also an instrument of historical change, in which many elements are involved. This study demonstrated a significant relationship between the reception of the artist and the history of the museum's collections.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：フランス近代美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：フランス近代美術史 芸術家受容 ポール・ゴーガン コレクション 美術館

1. 研究開始当初の背景

（1）フランス近代美術の受容研究は、これまで新聞雑誌の美術批評を中心に進められてきた。その一方で、とくに印象派について

は、ギュスターヴ・カイユボットによる 19 世紀末のコレクションの遺贈も含めて、多方面にわたる膨大な研究の蓄積がある。

こうした成果を踏まえて、本研究では、ポ

スト印象派の芸術家ポール・ゴーガンに焦点を絞り、芸術家受容との関連の中で、フランス各地の美術館に作品が収蔵された歴史と経緯を検証した。

(2) そこでは、ゴーガンならではの特別な事情も勘案しなくてはならない。彼はタヒチを中心としたポリネシアで晩年を過ごし、別居中の家族は主にデンマークを拠点に暮らしていた。本人と親族がフランスに不在のまま、その死後にゴーガンの評価は高まり、美術史的に重要な地位を確立するに至ったのである。よって、彼の芸術家受容は、知人や友人、あるいは間接的に影響を受けた支持者といった、他者の能動的関与があって初めて成立した。

それゆえ、一人の芸術家受容のプロセスを構造的に捉えようとするとき、ゴーガンの事例は極めて興味深いものであると言える。

(3) 振り返ると、ゴーガンに関する基礎的研究は十分に整っているとは言いがたい。2002年に刊行されたダニエル・ヴィルデンシュタインによる油彩画の作品総目録(カタログ・レゾネ)は、編纂者の死去にともない1888年で調査が途切れており、現時点では画業全体を扱いつつも多くの誤謬を含んだ、ジョルジュ・ヴィルデンシュタインによる1964年の旧版を、適宜修正しながら参照せざるを得ない。よって、フランス全体の美術館を対象にして、現時点のゴーガン作品の所蔵状況を網羅的に調べることは、今後の研究を進める上での基礎的作業であると考えられた。

(4) また、従来のコレクション研究は、重要なコレクターの生涯と活動を明らかにするか、一つの美術館の歴史に限定するものが大半であり、一人の芸術家に関して、その作品が各地の美術館にどのように収蔵されたのかを再構成しようとする試みは少なかった。それゆえ、コレクション形成と芸術家受容と関連付けることは、新たな研究の領域を切り開く可能性を秘めていた。

(5) 最後に、オルセー美術館のコレクションを調べてみると、日本人コレクター松方幸次郎が所蔵していたゴーガンの油彩画の存在を確認できる。松方コレクションの寄贈返還に関して、日本側の主要な資料は刊行されており、フランス側の資料に基づいた更なる調査が求められる状況にあった。

2. 研究の目的

(1) ゴーガンに対する現在の評価を歴史的産物として捉え、フランスの美術館を舞台としたコレクション形成史という観点から再検討を加えることが、本研究の主眼である。この芸術家の受容を歴史的に検証すること、どこに注目すべき転機があり、その時、どのような関与があったのかを明らかにするこ

と、そして、こうした変遷と美術館のコレクション形成史との関連を構造的に解明することが、主な目的であった。

(2) そのために、20世紀前半における美術館の活動を、一次資料に遡って厳密に検証することを目指した。美術館における作品収蔵は、芸術家に対する公的承認の第一歩となるが、そこには本人の思惑を超えて、コレクターや学芸員など、様々な意向が関わっている。

美術館の意思決定は必ずしも統一されているわけではなく、時に内部で意見の相違を抱えていた。そのような齟齬を浮き彫りにし、現在のコレクションの実態を所与のものではなく、歴史的経緯の中で生成されてきたものとして捉え直すことを最初の段階とした。そして、芸術家受容において、美術館が果たした役割を明らかにし、歴史的変化を促す機能を美術館が担っている事実を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

(1) まずは、パリと地方の美術館のコレクションを対象として、ゴーガン作品の所蔵状況を一覧化し、作品を入手した時期、方法、経緯を可能な限り、網羅的に調査した。

刊行されている所蔵品目録、フランス文化通信省が提供する各種のデータベース、美術館のホームページに掲載された情報などを参照し、さらに各地の学芸員に個別に問い合わせを行い、フランスにおける所蔵状況を把握した。

(2) その上で、リヨン美術館、ルーヴル美術館における作品収蔵に関して、現地調査を実施し、所蔵品目録の原本、委員会の議事録などの一次資料を参照し、それらの解読と分析を行った。また関連する時期の新聞雑誌を、地元紙も含めて丹念に渉猟し、作品収蔵の同時代の反応を確かめた。

(3) 作品収蔵の事例を時系列に並べた上で、ゴーガンを対象とした個別研究の進展、関連する展覧会の開催状況、フランス近代美術に関する概説書や理論書の言説との比較対照を行い、フランスにおけるゴーガン受容の展開を歴史的に分析した。

4. 研究成果

(1) 最初に考察の範囲を20世紀前半に限定した。その結果、フランスの美術館におけるゴーガン作品の収蔵に関して、ゴーガンとも親交を結んだ陶芸家エルネスト・シャプレによる《オレンジのある静物》(1880年、現在はレンヌ美術館所蔵)の遺贈を嚆矢として、1951年までの期間に、油彩、彫刻、陶器、手稿などを合わせて、計30点が収集されていたことが判明した。

年代を細かく分けてみると、1910年代までは僅か2点に止まっているものの、ゴーガンの個別研究の進展と合わせて、1920年代から作品収蔵が本格化したことも確認できた。ただし、その経緯は寄贈や遺贈によるものが大半で、購入の事例は極めて少ないのが特徴である。具体的には、前述の30点の内、購入によって入手された作品は4点を数えるのみであった。

ゆえに、コレクションの形成に関して、美術館が主導的な役割を果たすこともあるが、コレクターや遺族からの寄贈の申し出を待つという、受動的側面を抱えている実態が見えてきた。作品収蔵の決定は、必ずしも美術館の主体的な意志にのみ帰せられるのではなく、時として周囲からの偶然的な働きかけによるところも大きい。

(2) 以上のことから、作品の購入は極めて限られた場合にしか行われず、その重要性和特異性が逆説的に浮き彫りになった。4点の作品の内、最も早い時期の購入は1913年に遡る。リヨン美術館が《ナヴァ・ナヴェ・マハナ(悦楽の日々)》を購入した一件がそれに当たるが、本件に関する委員会の議論は紛糾し、最終的に市長エドゥアール・エリオの裁量によって購入が決定されたことが、一次資料によって裏付けられた。

(3) 一方で、ルーヴル美術館に1929年に収蔵された《白い馬》(1898、現在はオルセー美術館所蔵)の購入については、一定の資料は集められたが、大きな組織ゆえに関係者が多く、当事者の証言など、調べが行き届いていない部分がある。20世紀前半に実施された他の2点の購入事例も含めて、今後の課題としたい。

美術館委員会の構成メンバーは、とくに地方において、館長や学芸員だけでなく、芸術家、政治家、司書、大学教授なども含まれており、その意思決定には多くの立場からの様々な関与が認められた。それに加えて、作品を所蔵している画商やコレクターの動向も鍵を握っていた。

ただし、時代や場所に依じて背景となる事情は千差万別で、全体を包括的に論じることの困難も見えてきた。まずは個別の事例研究を積み重ね、芸術家受容をめぐる実態の解明と考察を深めていく必要がある。

(4) また、以上の作業を通して、ドイツ、イギリス、デンマーク、アメリカなど、近隣諸国の美術館とフランスとの温度差も明らかとなり、ゴーガンの作品収蔵に関して、本国の対応の遅れが改めて浮き彫りになった。コレクション形成史に関する研究の次なる段階としては、フランスを超えた地理的広がりの中で、作品の移動と人的ネットワークを多角的に検証することが目標となる。

(5) 松方コレクションについて、ナントの

外務省公文書館で関連資料を閲覧したが、調査は進行中である。日本とフランスの代表者による交渉の概要は掴めたが、日本側の資料と付き合わせる作業が残されている。さらに、ゴーガンの作品に論点を絞るのではなく、寄贈返還に関わる交渉全体を検証する必要性を実感することとなった。

(6) 本研究を通して得られた成果の一部は、「ポール・ゴーガンとフランス人コレクター—作品の創造と蒐集をめぐる政治学、1880—1910年」(『実践女子大学美術史学』、26号、2012年、9—37頁)にまとめた。また、芸術家表象という観点から芸術家受容を考察した論考“La Réception de Paul Gauguin et l'évolution de ses portraits en France”(『國學院大學紀要』、50号、2012年、65—78頁)を発表した。

本研究を通して、フランスにおけるゴーガンの芸術家受容が、美術館における作品収蔵と歩調を合わせて展開してきたことを確認した。ただし、芸術家の受容、認知、承認をめぐる実態は多様である。そのような状況において、調査に着手しやすいコレクション形成史は、受容研究を進めるための重要な手掛かりとなり得る。こうした作業を通して資料のコーパスを広げ、新たな視野を獲得できたことは、今後の研究の発展につながるものと確信している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① Koizumi, Masaya, “La Réception de Paul Gauguin et l'évolution de ses portraits posthumes en France”, 『國學院大學紀要』、50号、2012、65—78頁、査読あり

② 小泉順也、「ポール・ゴーガンとフランス人コレクター—作品の創造と蒐集をめぐる政治学、1880—1910年」、『実践女子大学美術史学』、26号、2012年、9—37頁、査読あり

〔学会発表〕(計1件)

① 小泉順也、「フランス近代美術とコレクション形成—ポール・ゴーガン作品の収蔵をめぐる歴史と交渉」、美術史学会東支部例会、コメンテーターの発表、國學院大學、2012年11月17日

6. 研究組織

(1)研究代表者

小泉 順也 (KOIZUMI MASAYA)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：50613858